

自己改革

J A紀南の挑戦

連載 ⑦

木熟201 (温州ミカン)

艦隊の司令長官が指揮をとる軍艦を「旗艦（ブラックスシップ）」と言う。J A紀南のミカンでその名にふさわしいのが早生温州の「木熟201」だ。「201」には、開花から200日以上木に成らせて熟させワンランク上の品質を目指すという意味がある。みかん部会内に設けた栽培グループには糖度14%以上を目指す農家が林立。平成29年産の市場販売価格は1キ788円と過去最高を記録した。メンバーが口を揃えるのは毎年の生産量の確保と、産地としての仲間の拡大だ。

29年産価格は過去最高に

紀南ミカンの牽引役果たす

昭和62年、全国的にミカン価格が低迷する中、紀南農協の「完熟201」が日本一の価格



初代会長の東良彦さん(写真中央)から、高品質であるとともに、安定生産を狙った剪定を教わる(3月22日、田辺市稲成町で)

とされた。その後、梅ブームや極早生ミカンの増加などで出荷量は減少。「ブランドを幻にしたい」と、J A紀南は平成24年、「木熟201栽培グループ」を立ち上げた。グループの目的は、201基準(糖度14%以上)の割合を高める、安定供給により消費者の期待に応える、生産者間の高品質生産意識・技術の共有、顔の

見える販売の機会を設け生産意欲を高めるなどである。設立当初は12人だった会員数も、若手の加入により、平成29年産では23人に拡大した。会長は初代の東良彦さん(稲成町)から、昨年4月、那須守さん(上芳養)に引き継がれた。栽培面では糖度向上のため完全マルチ被覆を義務づける。秋には201基準を目指して仕上げたメンバーの園地を巡回し、マルチ被覆・着果・品質状況を確認する。春には反省会を行っており、今年も若手の技術向上意欲に応え、初代会長の東さんの園地で剪定などの研修会を開いた。那須会長は「東さんが説いたのは再来年も見据えた剪定。いかに糖度の高いミカンを毎年成らせるかを皆で話し合えた」と語る。

201グループが生産したミカンは総合選果場に集まる。今年の荷受量は約39トで、そのうち約16トが201基準に合格した。合格率は約10トだった前年の27%を大きく上回る44%。夏の雨が少なかった等、品質向上にとつての好条件を考慮しても、合格率の増加はメンバーの高い技術が最大の要因と言える。

また、仮に201に不合格となっても、残りのほぼ全量が第2ランクの「木熟極天」(糖度13%以上)、その次の「木熟赤箱(12%以上)」等を楽々クリアするレベルの高さを保っている。

総合選果場の販売担当者は「201は紀南ミカンのレベルを全国に示す牽引役を果たしている。販売・指導が密接に連携し、201を筆頭に木熟などのブランド品の割合を高めることによって、農家の所得向上に貢献したい」と言う。

木熟201グループは今年2月、J A全中・全農などの実行委員会が主催する「第19回国果樹技術・経営コンクール」で農林水産省生産局長賞を受賞した。2月15日、東京での表彰式に出向いた那須会長は「市場や消費者に期待されているのだから、201の合格率を上げたい。現場研修も取り入れ、若手などメンバーをもっと増やしたい」と意気込む。



全国果樹技術・経営コンクールの賞状を手にする那須守会長

J A紀南は自己改革の実践を通じ農業所得の増大や地域の活性化にチャレンジしています